

## 研究プロジェクト

### 「獣害回避のための難馴化忌避技術と生息適地への誘導手法の開発」の紹介

野生動物研究領域長

川路 則友

農林業に対する野生動物による被害が全国的に深刻化しています。平成15年度における森林被害面積は約7千haですが、農作物に対する被害も大きく、面積で約13万ha、被害金額は約200億円にもものぼっています。なかでも農作物に被害をもたらすサル、シカ、イノシシといった大型獣による問題は中山間地域での生産者の耕作意欲減退をももたらすなど非常に深刻で、対策が急務とされています。加害動物に対しては、これまで数多くの防除技術が開発され、各地で施行されていますが、十分な効果を上げるに至っていないのが現状です。その原因の一つに、光や音、薬剤といった動物の感覚器官に訴える防除策に対しては、設置して一定期間は効果あるものの、次第に馴れを生じ（馴化）、効果が薄れていくということがあります。



農耕地のサルから（撮影：大井徹）



奥山のサルへ（撮影：大井徹）



また、同じ生態系の構成要員として、野生動物との共生を図ることが重要ですが、そのためには、たとえば堅牢な柵を張って野生動物を強制的に農耕地から排除するだけでなく、農作物の味を覚えて人間の活動域の中に定着した動物たちを、何とかして本来の生息環境にもどしてやる手だてが必要です。

そこで、森林総合研究所を中核機関とし、共同機関として5公立試験研究機関および5大学を加えて、今年度からスタートした標記プロジェクト（農林水産研究高度化事業、H17～19）では、まず、二ホンザルの感覚特性を動物心理学的手法により詳細に解析し、馴れにくい被害防止技術を開発します。また、シカについてもこれまで行われてこなかった飼育個体を用いた感覚特性の実験をとおして、効果が持続する新たな防除技術を開発します。さらに、実際に加害している二ホンザルの群れを人間とのトラブルの起こらない本来の生息地へもどしてやるような追い上げ技術を試行することにより、効率的に追い上げを行えるようなマニュアルを作成することを目標としています。



研究プロジェクトの概要図  
（絵：瀬川也寸子）